

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要

論文題目

自己実現に向かう外国語学習はどうあるべきか
ー「バブル・ワールド」に住むビジネスパーソンの日本語教育を考えるー

鈴木蘭

2011年 9月

本「修士論文概要」は、早稲田大学大学院日本語教育研究科 2011 年 9 月提出の修士論文「自己実現に向かう外国語学習はどうあるべきかー「バブル・ワールド」に住むビジネスパーソンの日本語教育を考えるー」をまとめるものである。修士論文の構成に従い、以下に第 1 章から第 5 章まで、その全内容の概要を、順に記述する。

第 1 章 序論

第 1 章では、研究のきっかけと研究動機、研究の範囲と「研究の問い」、研究目的と意義を述べている。

研究のきっかけは、筆者が勤務していた都内の日本語学校にある。その学校では、仕事のために来日した駐在員や、その家族が多く在籍している。そして、在籍生たちは一様に、「日本語ができるようになりたい」と積極的に日本語学習に取り組んでいる。しかし、「授業は分かるけれども、習ったものを上手に使いこなせない」とか、「生活の中に日本語を使う機会が無い」という悩みや葛藤を聞くことも多い。在籍生たちは、勉強に充てられる時間が限られている場合が多く、学校では、学習の効率化が追究されていたが、筆者は、使用する機会の少なさを認識した上で、学習の効率化を図るという方向性に、だんだんと違和感を覚え始めた。これが、研究のきっかけである。そして、ここから、人が人生の中で、外国語を学ぶことの意味と、学校という環境における学習のあり方を、突き詰めて考察したいという研究動機が生まれた。

この研究動機のもと、研究の範囲を、SHB 日本語学校のビジネス日本語を必要としない「ビジネスパーソン」に絞った。「ビジネスパーソン」とは、この研究の中で、「日本国内で勤務している経営者、会社員、公務員、自営業者」を指す。そして、研究全体を通して追究していく「研究の問い」を、「ビジネス日本語が不要なビジネスパーソンの日本語教育は、どうあるべきか」と設定した。

研究の一義的な目的は、この「研究の問い」を考察し、明らかにすることである。また、その過程において、日本語を使う機会が少ないことと日本語学習に対する熱意は、比例関係に無いことを明らかにし、表立った学習の必然性が無くても、日本語学習への学習欲求は発生することや、その学習の意味について議論することの重要性を示すことを二義的な目的とする。このように、日本語を使用する機会が少ないビジネスパーソンに焦点を当てた議論は、社内の公用語が英語化する企業が現れ始めた今こそ、必要であろうと考える。これが、研究の意義である。

第2章 理論的背景

第2章では、理論的背景として、学習観のパラダイム転換と、第3のパラダイムにおける「学習」、「ことば」の捉え方、そして、「ことば」を「学ぶ」ということについて述べている。

本研究では、「研究の問い」を考察するに当たり、研究範囲であるSHB日本語学校のビジネスパーソンの日本語学習を、3つの視点から眺めることを試みた。第1の視点は、教育学や心理学における研究者たちの、言語学習を捉える視点である。先人たちは、そもそも言語学習とは何のためにあり、どうあるべきだと主張しているのか。第2章では、この視点に焦点を当て、「研究の問い」を考察するための土台とすることとした。

学習観のパラダイム転換に関しては、西口(1999)、細川(2005)、久保田(1995)を参考に、「学習」というものがどのように捉えられてきたか、その考え方の変遷を追った。そして、西口の「状況的学習論」という視座、細川の「なぜ」に注目する視座、久保田の「構成主義」的視座を、研究の中で便宜上、「第3のパラダイム」と呼ぶこととする。SHB日本語学校という文脈の中で「研究の問い」を考察するにあたり、「第3のパラダイム」は最も適していると考え、この研究では、「第3のパラダイム」における言語学習の捉え方を、詳細に追っていく。

まず、レイヴ&ウェンガー(1993)やフレイレ(1979)などの主張から、第3のパラダイムにおける「学習」の捉え方を概観し、次に、ヴィゴツキー(2001)、バフチン(1988)、ワーチ(2004)を中心に、第3のパラダイムにおける「ことば」の捉え方を概観した。そして、両方を統合しながら、最終的に、第3のパラダイムにおいて、「ことば」を「学ぶ」とはどのようなことを指すのか考察した。結果として、「言語学習とは、ある実践的活動のために、協調関係を構築しようと交渉を繰り返すことにより、お互いに考えが更新され、変わっていく過程における必然的副産物である」という考え方を得る。つまり、言語教育の在り方を検討するにあたり、教室は、実践的活動に関わるプロセスの中で、参加者の全人的変容が促されるような場として機能することが求められると考えることができる。

そして、第3のパラダイムにおける理念を実践する日本語教育の事例を概観し、実践において重要なのは、学習者が、他者とつながり、自身が更新されていく過程を実感し、その人間成長とも言うべき体感的な学びに気づき、価値を見出すことであると言えるという示唆を得た。

第3章 調査

第3章では、「研究の問い」を考察するための調査について述べている。まず、調査のための問い、「リサーチクエスチョン」を2つ設定し、これらを明らかにすることで、「研究の問い」につなげることにした。「リサーチクエスチョン」は、「1. 個々の学習者にとって何のための日本語学習か」と「2. 教師の意識や教室の成り立ちから見える学習者の特性はどのようなものであるか」である。

次に、「リサーチクエスチョン」が関連する分野の先行研究を概観した。「リサーチクエスチョン1」に対しては、「学習動機に関する研究」、「学習ニーズに関する研究」、そして、「学習の意味づけに関する研究」を、異言語学習を中心にまとめ、「リサーチクエスチョン2」に対しては、「教室における授業の中に、教師側の授業を設計する意図と、学習者側の学習に対する意図が混在し、両者の複雑な絡み合いがあることを記述している研究」を、日本語教育の分野から取り上げ、概観した。

次に、調査概要を説明している。調査には、多面的な現実を認めるべくライフストーリーインタビューを採用することとし、収集したデータを分析するために、佐藤(2008)を採用することとした。また、調査協力者の語りに影響を及ぼす可能性がある要素を、読者にも可視化するために、語りが生まれた文脈や環境について記述した。すなわち、具体的な調査工程や、調査フィールド、調査協力者の背景、また、筆者との関係について、述べた。

リサーチクエスチョン1のための調査では、調査協力者であるビジネスパーソン4人の語りを分析し、「バブル・ワールド」という鍵概念を得る。これは、「泡の中にある世界」というイメージである。それを覆う膜は透明で、目に見えにくく、一見、日本語社会と繋がっているようで、しかし、確実に断絶している別個の世界を表す。また、泡のようにふわふわと宙に浮いていて、日本に存在するのに、日本に所属していないような、そんなイメージの領域である。この鍵概念を基に、リサーチクエスチョン1を考察し、結果として、「個々の学習者にとって何のための日本語学習か」という問いに対し、『バブル・ワールド』外との接触、交渉という場面に対して、自ら進んで挑戦することによって、より納得できる自己像を具現化するための学習であったという結論を得る。この、「より納得できる自己像を具現化する」ことを、この研究の中では、「自己実現」とする。学習者4人の語りからは、この根本的な学習目的に対して、それぞれの日本語学習がどのような軌跡をたどったのか、つまり、どのように学習が成功し、また上手いかなかったのか、各人の学習の歴史的にも迫ることができた。

リサーチクエスション2のための調査では、調査協力者である教師2人をインタビューして、更に、授業見学を行った。また、学校スタッフ2人をインタビューし、学校の基本方針について確認した。これらの語りを分析することによって、「教師の意識や教室の成り立ちから見える学習者の特性はどのようなものであるか」を考察した。結果として、「文の要素を理解しながら、文全体を把握していくことが、自分の学習ストラテジーであると認識する」ような【学習に対する態度と信条】や、スタッフや教師について、「コースや学習材料など『サービスを提供する人』と位置付け、自らの希望や要望に沿うべきであると考えている」ような感覚など、複数の側面における学習者特性を得ることができた。

第4章 総合考察

第4章では、まず、第3章で記述した、2つのリサーチクエスションに対する考察と、学習者の学習の軌跡を統合することによって、SHB日本語学校の日本語学習の総合的概観として記述している。基本的には、「言語学習は、語彙や文法などを暗記して、部品を獲得していく作業である」という感覚を、学習者も学校も共通して保持しており、この作業が商品化、目標化、階層化していることや、一方で、学習者は、日本語学習自体を必要不可欠なものだと認識していない側面もあること等が、SHB日本語学校の総合的特徴として認められた。

次に、学習のあり方を提言するに当たり、土台に置くべき適切な視座を再度検討した。結果、やはり第3のパラダイムにおける考え方が必要であると判断し、第3のパラダイムの視座から、SHB日本語学校における日本語学習への提言を図ることとする。

提言では、まず、学習内容の軸として、「Ⅰ.『自立』するための、実用的課題への対応」、「Ⅱ.『社会的交流』をするための、会話参加に関する課題への対応」、「Ⅲ. 自分の問題意識の明確化と、再考」を設定した。これは、各自が抱える現実的な課題にどう対応できるかを共に考えながら、その課題自体の自明化された枠組みを問い直すことを促すことを目的としている。そして、目の前にある課題に挑戦しながらも、ひとりひとりが、世界をどう認識しているのか、なぜかを知ることによって、どのように、「より納得できる自己像を具現化する」かを考える。

学習の形式については、学習は実践の中にあるという前提の下、全ての学習内容は、学校の授業枠の中で、実践として取り込まれるべきであると考えた。すなわち、授業の枠内で、買い物にでかけたり、会話をしたり、議論をしたりする。このとき、上述したような、

学習者の【学習に対する態度と信条】や、スタッフや教師を「コースや学習材料など『サービスを提供する人』と位置付け、自らの希望や要望に沿うべきであると考えている」感覚が、不安要素となることも予想される。しかし、語彙や文法学習は否定せず、随時実践を振り返り、知識や情報を共有する時間を設ける等すれば、解決されると考える。また、学校に入学する前に、学校の理念をきちんと示すことで、入学後のトラブルは避けられるのではないかとと思われる。そして、コースの単発化、オンライン化を図ることで、日本語学習自体を必要不可欠なものだと認識しておらず、固定的な日程での継続的な参加は望めない学習事情にも、対応可能になると考える。

第5章 結論

第5章では、研究全体を振り返り、先行研究との比較による相対的位置づけ、本研究の貢献、今後の課題を述べている。

先行研究との比較では、学習動機に関する研究と、学習ニーズに関する研究に関して、研究の結果は、先行研究の考察を支持したが、その結果をどのように今後の実践につなげるかという方向性に関して、異なった。学習の意味づけに関する研究に関して、様々な先行研究に見られる意味づけが、すべて含まれるという結果を得、学習の意味づけが多面的であることを確認した。教室における授業の中に、教師と学習者の意図が混在し、複雑な絡み合いがあることを記述した研究に関して、この研究でも同様の結果を得たが、舘岡(2010)のように、明示的に意見交換することの重要性が示唆された。

本研究の貢献としては、第1章でも触れたとおり、今後英語が重要視され、海外から採用される外国人社員も増える今後のために、「バブル・ワールド」という認識の仕方を考慮し、ひとりひとりのビジネスパーソンが、「自己実現」を図れるよう働きかけることは、必要不可欠であることを示すことができた。また、そのために、日本語学習の場が、学習をどのように捉え、従ってどのような学習のあり方を提供していくのか議論していくことは、非常に重要であることも示された。

今後の課題としては、この研究は、学習の在り方を論理的に組み立て、提言するにとどまっているので、今後、この理論に基づき、教師たちと議論を交わし、そして何より実際に実践を試みる必要があると考える。

参考文献：

- 久保田賢一（1995）「教授・学習理論の哲学的前提－パラダイム論の視点から－」『日本教育工学雑誌』18号 pp.219-231
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法－原理・方法・実践』新曜社
- 舘岡洋子（2010）「多様な価値づけのせめぎあいの場としての教室－授業のあり方を語り合う授業と教師の実践研究－」『早稲田日本語教育学』7号 pp.1-24
- 西口光一（1999）「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100号 pp.7-18
- バフチン、ミハイル著、新谷敬三郎、伊藤一郎、佐々木寛訳（1988）『ミハイル・バフチン著作集8 ことば 対話 テキスト』新時代社
- ヴィゴツキー著、柴田義松訳（2001）『新訳版思考と言語』新読書社
- フレイレ、パウロ著、小沢有作、楠原彰、柿沼秀雄、伊藤周訳（1979）『被抑圧者の教育学』亜紀書房
- 細川英雄（2005）「学習者主体とは何か－日本語教育における学習者主体と協働の意味－」『日本語学』24巻2号 pp.96-110
- レイヴ、ジーン&ウェンガー、エティエンヌ著、佐伯胖訳（1993）『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－』産業図書
- ワーチ、ジェームスV著、田島信元、佐藤公治、茂呂雄二、上村佳世子訳（2004）『心の声－媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版